

# ARCUS

Artist in Residence - IBARAKI

現在のアート・芸術文化を守谷から。

●問合先 アーカススタジオ (もりや学びの里内)  
日・月曜日休館 ☎46-2600 (10:00 ~ 18:00)  
✉arcus@arcus-project.com  
◎詳細な情報はアーカスプロジェクトで検索!



オープニングセレモニーでのガイドツアー 撮影：加藤甫

11月末に行われたオープニングスタジオにおいて、レジデンスプログラムの招へいアーティストが、アーカスプロジェクトでの滞在制作の成果発表を行いました。守谷市内外の方にアートを楽しんでいただける機会となりました。

## クリストファー・ボーリガード



《半分空虚な時間》  
インスタレーション 撮影：加藤甫

1964年と2020年の2つの東京オリンピックによって、どのように都市が変化してきたかをリサーチしたクリストファーは、守谷の陶芸家からお借りした陶器や映像などで構成したインスタレーション(空間全体を使った表現方法)を発表しました。64年の東京オリンピックのために日本橋の上を覆うようにして架けられた高速道路と、20年のオリンピック開催地となる東京湾の埋め立て地を結ぶのは、日本橋の下を流れ東京湾へと注ぐ水です。カシマサッカースタジアムなどで集めた水をスタジオに配置された陶器に溜め、室内で蒸発していく水をさらに除湿機で集め循環させることで、2つのオリンピックの歴史のサイクルを表現しました。

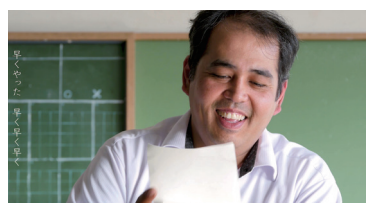
## ルース・ウォーターズ



《無題》  
映像 8分

資本主義社会が私たちに与える不安について関心を持つルースは、宇宙空間が人間の心理に及ぼす影響についてリサーチし、インタビュアーなどを映像にまとめ発表しました。映像では、宇宙飛行士の山崎直子氏が、宇宙の無限に広がる暗闇に恐怖を感じた経験や、JAXAとの共同研究を行った心理学者が、微小重力かつ視覚的な抛り所のない宇宙空間では、人間が自分の位置を把握し難いことなどを語る様子が、日本での日常風景の映像と組み合わせられて表現されました。宇宙での体験と、地球上の私たちの暮らしを対比させることで、強固に感じられる私たちが生きる現在の社会の現実を、少し離れたところから考え直すことができるかもしれません。

## 渡邊拓也



《Good luck on your journey》  
映像 24分30秒

常総市の日系ブラジル人コミュニティと日本人社会との関係性に関心を持った渡邊拓也は、リサーチを進める中で出会った、ある日系ブラジル人の親子と協働で制作した映像を発表しました。ブラジルで育ち日本へ移住してきた男性は、20年余りの日本生活で日本的な所作を身につけた一方、感情を日本語で表現することができません。いわば、日本社会に溶け込むために社会から求められる人格の中に、素直な考えを表現できずにいるポルトガル語話者としての彼がいたので、渡邊は、そんな彼に、ブラジルを発つ前の自分に向けてポルトガル語でアドバイスする手紙を書くことを提案します。映像では、その手紙を、日本語とポルトガル語双

方を話すことのできる息子の助けを借りて、つたない日本語で読み上げる彼の姿を映し出しました。まだまだ均質な日本社会において「他者」として生きる難しさを語る映像は、私たちがこれから迎えることになるであろう移民と共存する社会についてのアドバイスのようにも感じられます。

## アートカレッジ 「2019年のアート、 2020年のアート」

2019年のヴェネチア・ビエンナーレ(イタリア)、あいちトリエンナーレ(愛知)、Reddot Art Festival(宮城)などを振り返り、来るべき時代のアートについて考えます。世界がどう変わっていくのかアートをとおして眺めてみませんか。

- ▼日時 令和2年1月18日(土) 午後1時~2時30分
- ▼受講料 1500円
- ▼会場 たいけん美じゅつ場「VIVA」内ラーニングルーム(取手市中央町2-5 ボックスビル取手4階)
- ▼定員 30人(要予約・アークスホームページから申し込む)
- ▼協力 ボックスビル取手